

「第3回くまもと未来会議リレー講演」講演録

- ◆ 日 時：平成26年2月7日（金）14：00～16：00
- ◆ 場 所：玉名温泉 ホテルしらさぎ 北館5階 王月
- ◆ テ ー マ：知の集積～夢を実現するために～
- ◆ 出 席 者：姜 尚中 委員（聖学院大学全学教授、東京大学名誉教授）
今井 義典 委員（立命館大学客員教授、元NHK副会長）
蒲島 郁夫 （熊本県知事）

【開会あいさつ：蒲島知事】

皆さん、こんにちは。今日は、「第3回くまもと未来会議リレー講演」に、たくさんの方々に来ていただき、誠にありがとうございます。この「くまもと未来会議リレー講演」というのは、全国の第一線で活躍されている方をお呼びしてお話を聞き、いろいろな意味で世界的なところから日本を考え、日本全国から熊本を考えるような、そういうきっかけになりたいと思い、平成20年から開催しています。

今日は、皆さんもよくご存知の姜尚中さんをお招きし、また、少し年配の方は恐らくご存知だと思いますが、NHKの朝の番組のキャスターをされておられた今井義典さんをお招きしました。その二人で、夢のある教育とは一体どういうものかについて考える機会にさせていただきたいと思い、今日は「知の結集」という話をします。

夢のある教育と、知の結集はどういう関係があるか簡単に申し上げますと、夢のある教育のためには、様々な意味で知の結集が必要だと私は考えています。その一番シンボリックな例が、熊本県立大学の理事長に五百旗頭真先生を招へいしたことです。元々、五百旗頭先生は熊本と全然関係なかったのです。ただ、私とハーバード大学で同じ頃に出会い、それから約35年の付き合いになりました。この五百旗頭先生を呼んだ時の私の殺し文句として、「ちょうど細川藩が宮本武蔵を熊本に呼んだ、そのような気持ちであなたを呼んでいます」と言ったところ、引く手あまただったと思いますが、防衛大学校長を辞められた後、熊本に来てくださいました。

このような「知の結集」というのは、知を吸収するための制度的な枠組みを作ることです。もう一つは、受信者側である若者の夢や将来への希望です。この二つがあって、初めて夢のある教育ができるのではないかと考えています。

そういう意味では、今、熊本は世界を視野に入れながら、様々な政策を進めています。例えば、昨年5月に、阿蘇が世界農業遺産に認定されました。これも、世界の中の阿蘇をめざした一つの動きではないかと思えます。これまでは熊本の宝だったのですが、世界農業遺産になることによって、阿蘇は世界の宝になっていきます。だから今、皆さんは熊本の学生

でもありますが、将来は世界の宝になってほしい。

私は、教育再生実行会議で2週間に1回東京に行き、安倍首相の前で様々な教育の議論をしています。その中で、私がとても強調しているのは、今はみんな内向きになってしまっているので、外向きの海外チャレンジができるようなグローバル人材を育成しようということです。私自身も日本の大学は出ておりません。アメリカで農学部に入り、その後、政治学を勉強するためにハーバード大学へ行きました。そういう可能性が、世界に目を向ければもっともっと広がっています。それを、夢のある教育、あるいは海外チャレンジというかたちで熊本県の政策に生かしているところです。

今日は、北稜高校の皆さんがたくさん来ていらっしゃいますが、北稜高校と私の接点は二つあります。私がまだ東大の教授だった頃、北稜高校で「人生は夢」という話をしました。もうずいぶん前になりますので、ここにいらっしゃる方は聞いておられないかもしれませんが、最初の接点は私の講演を北稜高校で行ったことです。

2番目に、知事になってから、皆さんがくまモンを田んぼの中に描こうと企画され、「くまモンの田んぼプロジェクト」に皆さんが参加してくださって、そこで私も一緒に田植えをしました。そういう接点があったので、今回は、この玉名にしようということで、玉名でのリレー講演が実現しました。

最後になりましたが、今日ご参加の皆さまの益々のご発展とご健勝、また、この会が大成功でありますことをお祈りして、私のあいさつとさせていただきます。本日は、ご来場誠にありがとうございます。

講演「知の集積～夢を実現するために～」

【講演Ⅰ：聖学院大学全学教授、東京大学名誉教授 姜尚中委員】

今日はたくさん高校生が来ているので、どんな話をするかいろいろ迷いました。ただ、知事の顔を見た途端に、ますますお若くなって、光り輝いているような気がしました。本当に夢があるからだと思います。

私の後で話をされます今井さんは、世界のいろいろなところに出かけられて国際経験の豊かな方ですから、私はその前座のつもりで少し聞いてください。

夢を叶える教育ということですが、私は高校時代に何を考えていたかということ、やはりこれからどうなるのだろうと悩んでいました。熊本は、水も緑もあり空気もきれいで、夏は暑いけれどもいろいろなことがあるし、要するに環境は非常に良かったのです。しかし、これからどのような人生を歩んだらいいのかということ、なかなか自分自身で思い描けなかった、そういう時代を皆さんの顔を見ながら思い出します。

夢というものは、大きい夢も小さい夢もあります。また、ある人にとっては夢ではないようなことでも、自分にとっては夢である場合があります。先ほど知事が言われたとおり、世界に羽ばたいていくその前に、自分が生まれた場所をととても大切にすることが、将来、自分自身が外に出て行って羽ばたくために非常に重要なことです。

高校時代を考えてみますと、私自身は自分の足元を見るよりも、何か遠くを見ていたような気がします。遠くのことばかりを見て、そこに憧れを抱いて、自分の周りはずつまらないと考え、こんなつまらない場所よりは早く自分が何か夢が叶えられるような場所、そういう場所をきょろきょろ探していたような気がします。

そういう時期は必ずあると思います。それは皆さんと私との年齢の違いかもしれませんが。知事や私、あるいは今井先生の世代は、やはりアメリカという存在が非常に大きくて、とにかくアメリカに憧れを抱き、何とかそこに行きたいと思っていました。自分たちが見る映画もテレビも音楽も、ほとんどがアメリカです。言わば、我々は、良き時代のアメリカをモデルにしながら高校時代を送っていたような気がします。

しかし、現在の皆さんは、日本は世界の数ある経済大国ですし、我々の時代と違ってかなり豊かになりました。だから、私が東大時代に、大学は学生諸君に「海外に行くようにしたら」といろいろ力付けたり、海外渡航費を出したりするのですが、「そんなところに行くよりは、温泉に入ってのんびりした方がいい」という学生もいたのです。皆さんは、どうかは知りません。しかし、玉名は温泉が有名だし、「そんな遠くへわざわざ行くぐらいだったら、温泉に浸かっておく方がいい」という人もいるかもしれません。ですから、我々の時代に通用したことは、必ずしも皆さんに、なかなかリアリティーをもって受け入れられないかもしれません。それを前提に、皆さんが夢のある教育や自分なりの夢を育てていくためにはどうしたらいいのか、私が考えていることを少し述べてみたいと思います。

玉名市のすぐ近くの天水町には、夏目漱石で有名な「草枕」の舞台があります。「草枕」は、世界的に有名です。最近、有名な世界的な天才ピアニストのグレン・グールドという人が、「20世紀で読むべき本は二つある」と言っています。その一つは、夏目漱石の「草枕」で、もう一つはトーマス・マンの「魔の山」です。「魔の山」というのは、ドイツ文学で有名な世界的な小説です。ということは、世界中の人々が、もしかしたらこの玉名市や天水町を、漱石の作品を通じて知っているかもしれないのです。つまり、自分の町は、熊本の中で熊本市から少し離れてこんな場所にあると思っている人でも、自分が「ここはずつまらない」と思っている場所が、もしかしたら世界的な場所になっているかもしれないということです。意外と我々は遠くばかり見て、自分の足元にある財産を見失っている場合があるのです。

つまり、まず私が皆さんに一番言いたいことは、世界に羽ばたく前に、自分の足元にある財産をしっかりと見つめてほしいということです。そこをしっかりと見つめることによって、世界に羽ばたいていく力が出てくるのではないかと私自身は思っています。

私は、実は、15歳の中学3年生の時に家出をしました。私の友人と3人で、とにかく東京を見てみようということになりました。1964年、東京オリンピックがあった年です。「東京はすごか」と大人がみんな言っていたので、3人で親に内緒で、熊本駅から東京駅の八重洲に着いた時には、確か30時間ぐらいかかったと思います。世田谷の烏山というところに徳富蘆花を記念した芦花公園がありますが、その近くの読売新聞の新聞配達寮に1カ月間転がり込んで、新聞配達をしながら東京にいました。見るもの、聞くもの、もう本当に夢のような世界でした。当時は坊主でしたから、実は東京の男の子に「お前のところは坊主かよ」と言われ、小突かれたりしました。あの時代、東京に行って丸坊主なのは、すぐ田舎か

ら出てきたと分かります。しかし、その1カ月間は夢のようで、非常に面白かったです。

皆さんは、「スタンド・バイ・ミー」というアメリカ映画を見ましたか。それは男の子たちの、あるひとときのアドベンチャー、冒険を描いた映画です。そういうことを、なかなか今の皆さんはできにくい環境にあるのではないかと思います。もちろん、私は皆さんに家出をなさいと言っているのではなく、そういう経験を持ってほしいということです。

最近、朝日新聞から「いじめられている学生へのエールを書いてほしい」と言われ、私は「家出なさい」と書いています。いじめられた時は家出をする。家出をすれば、必ず親や先生が探します。もちろん、皆さんに「家出をしろ」ということを勧めているのではなく、いじめられて自分が本当にへし折れてしまうくらいだったら家出をすればいい。家出をして自分がどこで生きていくか、1回やってみればいい。つまり、今の10代の皆さんのような世代は、ここで今頑張っていて、ここで駄目ならば他があるということを、あまり思いつかないのではないかと思います。

先ほど、知事が「海外に目を向けてほしい」とおっしゃった意味は、自分にはこれがあるけれども、これがないならばあれもある、あれが駄目ならばこれもあるというように思ってくると、人間はとても気が楽になります。この場所で一生懸命頑張っているが、ここが駄目ならば、もしかして全く見知らぬこの地域でやってみればうまくいくかもしれません。私は、15歳の時に自分と友人と3人だけで、とにかく大人の世界に飛び込んでみて初めて「ああ、これは生きていける」という感触を持ったのです。これは非常に重要なことです。ですから皆さんに、場合によってはひと夏、自分たちで計画をして少し離れたところに、東京に行っていないならば一回は行ってみる。学校の先生に引率されて行くのではなく、自分たちで計画を立てて行くことが非常に重要です。

それから2番目です。皆さんに一番申し上げたいことは、これから高校生活を送り、それから大学に行く人も、すぐに役に立つことだけをしないということです。今やっていることが受験に役に立つか、すぐ社会に出て役に立つかということだけを考えて、知識を摂取しようとしなさいということです。今は役に立たないかもしれません。しかし、それが10年後、20年後、役に立つ場合があるのです。恐らく、大人を見て、また学校の中で、皆さんにとってこれは役に立つ、これは役に立たないどこかで区切りをつけて、役に立つことだけをしようとしているのではないかと思います。

しかし、これからの日本の社会や世界は、それだけではなく、役に立たないことから初めて自分の本当にやりたい夢というものが見えてくる場合があるわけです。例えば、知事は、最初は農協の職員であられた。そして、農業研修生としてアメリカに出て、大学で豚などの畜産の様々な研究をされた。そして政治学と出会う。そういうふうには、すぐに役に立たないかもしれないけれども、何か役に立たないことを一生懸命やることを通じて、自分が叶えたい夢というものが、はっきりと自分なりに見えてくることがあると思うのです。

第3番目。今、役に立たないことにもしっかりと目を向けるためにはどうしたらいいか。皆さんは、夏休みを利用して1冊でもいいので文庫本の古典を読んでほしいのです。それは政治でも経済でも社会でも文化でも文学でもいい。例えば夏目漱石の「草枕」でもいいので1冊読んでいただきたい。それをじっくりと読むことによって、役に立たないことに自分が目

配りでき、初めて自分の夢というものもそこから見えてくる場合があるのです。

優秀な人は、役に立つことを要領よくやれる人です。しかし、それはやがて必ず息切れしますし、本当の夢というものを自分の内側から描いていくわけではないから、他人から与えられた夢は、自分の本当に考えている夢とは違うのです。自分が叶えたい本当の夢は、役に立たないことに目を向けることから初めて生まれるかもしれません。そのためには読書が必要です。これは、すぐ受験に役に立たないかもしれません。しかし、10年、20年後、必ず役に立ちます。

第4番目。皆さんは、高校生の時も、大学生になってからも、じっくりとたっぷりとモラトリアムの時間を大切にしてほしいということです。モラトリアムというと、社会的義務を果たさない人と否定的に言う人がいます。しかし、私の考えでは、今、どうして若者が夢や希望というものについて語るのが難しくなっているのかと言うと、なぜ生きるかや、なぜ自分はこういうことをしようとしているのかなどについて、自分なりに納得のいく回答を持たない場合があるのです。

東京大学に入ることが人生の目的だった。しかし、入ってみて自分の目的は何だったのだろうかと思う学生もいます。夢というものは、そういうものではないと思います。皆さんが生涯その夢に向けて、たとえどんなに挫折しても、やはりその夢だけは叶えたいと思って努力をする。それが皆さんにとっての夢だと思えます。そのためには、なぜ生きるのか、なぜ自分はこのことに一生懸命頑張るのかについて、高校と大学の時代に、しっかりとそういうものに関わるような本や大人の話に耳を傾けてみるということです。

第5番目。私の考えですが、教育というものはイニシエーションを受けます。イニシエーションとは、例えば、お醤油など個々の「秘伝のたれ」というものがあります。秘伝のものというのは、じっくり時間をかけて作られそのお店にしかないものです。そして、それでおもてなしをすると、とてもおいしい。人生にも、その秘伝を教えてくれる我が師と仰げる人との出会いがあるはずなのです。恐らく知事も、そして今井先生も私も、我が師と仰げる人と出会いました。今から大切なことは、皆さんが今度大学に入り、我が師と仰げる人と出会ってほしいのです。そういう人と出会って、初めて夢というものがこんなものだということを掴み出す場合があるのです。自分で夢が分からなくても、我が師と仰げる人と出会うことによって、人生の秘伝を教えてもらうことができます。教育というものは、本来そういうものだと思えます。私も、我が師と仰げる人からそれを教えてもらいました。残念ながら、その先生は59歳で白血病で亡くなってしまいました。大切なことは、我が師と仰げる人と出会うことです。そのためには、普段からそういう出会いというものを準備しなければなりません。ただ待っているだけでは、そういう人とは出会いません。

第6番目に大切なことは、我が友と言える人と出会うことです。皆さんは、自分の全てをさらけ出して、全てを語り合える自分の友と言える人はいますか。私はそのことを「心友」と言っています。親しい友ではなく、心の友です。皆さんは、スマホやケータイを持っていると、いつでもお互いに連絡を取り合っています。場合によっては、連絡したのに3分間何の返事もないと、シカトされたと思うかもしれません。しかし、そういうふうに普段どんなに付き合っているか、自分が親にも先生にも言えないことを、どうしてもこの友人に話した

いと思う時に話してみて、その友人がずっと引けていったら、とても悲しいでしょう。だから、もしかしてこういう話をしたら友人が逃げていくかもしれないと思って、結局、親友だけど、自分の悩みというものをなかなか話せないという場合があるのではないかと思います。10人の遊び仲間といっても、たった一人の心友が必要なのです。これは、とても大切なことなのです。そういう友がいれば、二人で本当に腹を割って自分の望みや夢を語り合えます。その夢がどんなに荒唐無稽であっても、その友人ならばその夢に付き合ってくれるかもしれません。

所詮、学校というものは、我が師と心友に出会う場所なのです。大げさに言えば、その二人だけでいいのです。そういう人と出会えば、自分の夢を叶えようとする力になっていくわけです。私は非常に恵まれました。我が師と仰げる人と出会ったのです。そして、我が友、心友と言える人も出会いました。残念ながら彼も、どういうわけか49歳で大腸がんで亡くなってしまいました。ただ、私が大学に入って彼に全てを話し、彼はそれを全部聞いてくれ、メモに取って残していたのです。これを黒いかばんの中に入れ、彼が亡くなる時に、自分が亡くなったら必ずこれを棺桶の中に入れ、一切、自分の家族は見てはならないという遺言を残していたのです。私は、非常に感動しました。自分のことを全てさらけ出しても、それを受け止めてくれる友がいる。これは親や、あるいは大人によっては叶えられない大切なものなのです。

夢というものは、小さい夢であれ大きい夢であれ、その夢に向けて努力し、それを失わない。そのためには、我が師と仰げる人と心友が必要です。そういう人と出会うためにこそ、普段、自分が準備をしておかなければなりません。ただ待っていて良いことがあると思うのは、決してそうではないと思いますし、夢というものは、それぞれが持っていると思います。大きな夢を持って海外に羽ばたきたいという人、それも大きな夢です。自分は小さな夢で、幼稚園の先生になって子どもたちと一生懸命遊んで子どもたちを育てたい。これもまた立派な夢です。夢には、どれが一番価値があるかなど、そんなわけはありません。一人一人の自分の人生の、それぞれに合ったものを夢として育ててほしいです。

残念なことですが、なかなか今の日本の社会の中で、夢や希望を語るのは難しいことです。熊本のこの場所で自分は生まれて育って、郷土を愛し、そして、やがて自分の夢を叶えるために我が師と我が友と出会い、自分が役に立たないことにも目を向けるためにしっかりと読書をし、そして役に立たないことを大切にしながら、その中から自分なりの夢をしっかりと見つけ出し、それに向けて生きていくということがとても大切なことだと思います。

ですから、皆さんは、そのためにいろいろなイニシエーションを受けてほしいのです。目を外側に向けてほしいのです。同時に、それを通じて自分の郷土というものを愛してほしいのです。私も、15歳の時に東京に出かけて行って初めて、それまで考えられないぐらいに熊本の良さが分かりました。今も海外に出ても、やはり熊本がいいのです。熊本に帰ると、本当に自分の地のままだに戻れるし、郷土というものはどんなに素晴らしいものかと肌身に染みて分かります。

私が一番言いたいことは、役に立たないことにしっかりと目を見据える。第2番目には、そのためには読書が必要です。しっかりと本を読んで、ものを考える人間になってほしい。

第3番目、我が師と出会える人に出会ってほしい。第4番目は心友と出会ってほしい。そして最後ですが、夢は小さいものも大きいものも含めて、自分なりの夢を持ってほしいということです。一応、皆さんが将来大学をめざし、東京やその周辺で私の大学に来たいということであれば、いつでも引き受けます。どうぞ来てください。

では、私の話はこれで終わります。どうもご清聴ありがとうございました。

【講演Ⅱ：立命館大学客員教授、元NHK副会長 今井 義典委員】

玉名市の皆さん、そして北稜高校の皆さん、こんにちは。玉名市には初めて来ました。熊本県には、仕事や観光、そして知事のところにお邪魔するために何度か来ていますが、今日、この町に初めて伺って、若い皆さんとお話をする機会ができて、大変光栄に思っています。

私は、放送の仕事を長い間していました。定年になり放送の仕事を終えて、今は大学で教える仕事を中心にやっています。しかし、40年以上も放送局で仕事をすると、放送の仕事がまだ体に染みついている、なかなかそこから抜け出せません。こういうお話をする機会をいただき、やはりどうしても放送的にやりたくなくなってしまいます。

放送というのは、漢字で書いて逆に読むと「送りっ放し」です。皆さんの方からの反応はあるのですが、あまり自分の中に留まらず、一方的に皆さんに情報を届けています。娯楽番組を届ける、スポーツの中継をする、そういう仕事なのですが、私は主に皆さんにニュースを知らせる仕事をやってきました。

ニュースを知らせる仕事には、皆さんぐらいの年から興味を持ち、だんだんその興味が現実をめざすものになってきました。もちろん、いろいろなきっかけもあったし、姜先生のおっしゃるように、いろいろな先生の中で、自分の道を創っていただく人が、振り返ってみるといるものです。特に大人になってからは、仕事をしていく上でいろいろな人の教えをそれとなく受け継ぎ、そして盗み取っていく。そうして自分が少しずつ成長していく。しかし、私はもうすぐ70歳になりますが、自分が70歳を迎えようとしていてもまだまだ勉強が足りない、もっと知りたいことがある、いつまでたっても終わらない、どうしてこんなことが分からないのだ、答えが出ないのだと思います。今から皆さんは、私たちよりもっともっと長生きしていきますが、一生、自分の目の前にいつも新しい課題がつきつきと出てきてその課題に挑戦し、乗り越える。そして、少しずつ賢くなっていくけれども、いつまでたっても賢くなりきれないのが、人間だと思っています。

蒲島知事と最初にお会いしたのは、今から30年ぐらい前になります。それから、姜先生には、私がテレビの仕事をしている時に何度かテレビに出演していただきました。今日は、お友達であり、先生でもあるお二人に加わってお話をするという立場にあるのですが、私が皆さんの年頃から何を考えていたのかというのを振り返りつつ、お話をしようと思います。

テレビの仕事を選んだのは何故か、いま振り返ってみると、自分が大学生の時に、アメリカに行った経験が大きなきっかけだったなと思います。アメリカでは北から南まで色んな町に行きましたが、ある町で小学校に呼ばれて日本の話をしたことがありました。忘れられないのは、小学生からの色んな質問でした。「日本にはエスカレーターやエレベーターはあり

ますか」と聞かれました。今から47～8年前ですが、もう日本にもありました。それから、「日本は香港の一部か」などという質問を受けました。世界中で、子供の時から少しずついろいろな人と出会い、姜先生がおっしゃったように様々な本を読み、その中でいろいろと学んで、自分の世界を広げていくのです。

私は、アメリカに行き、アメリカの新しい国を見て、いろいろなことに驚きました。しかし、一番感じたことは、自分がいかに自分の国のことを知らないかということでした。それを解決するにはどうしたらいいか。やはり、ジャーナリストになって、日本のことを勉強し、みんなに「こういうことが起きているのですよ。これがこの問題の根底にあるのですよ」と伝える役になれば、きっと、我慢してでも勉強していこうと思っただろうと思ってこの道を選んだと、今振り返ると言えると思います。

いろいろな欲望が人間にはあります。遠くで起きていることをできるだけ見てみたい、遠くの世界に行ってみみたい、行くのは無理でも自分がそこで何が起きているかたくさん知りたい、そういう欲望があるのです。その欲望に、人間は技術の発達によって、いろいろ答えを出してきました。

遠くのことを、長い距離を超えて、見たり聞いたり様々な操作をするということを、英語の単語の一番上に「Tele」という言葉を付けて、新しい言葉が生まれてきました。一番初め、おそらく四百年ほど前にできたのが「Telescope」、望遠鏡です。そして、だいたひ人間の歴史が過ぎてから、1840年に「Telegraph」ができました。「Telegraph」というのは電報です。人の言葉、メッセージを「ツートン、ツートン」という信号に変えて電線を伝い、他の遠く離れたところに送ることができ、お互いに情報のやり取りをすることができるようになったのです。それから、声を聞くことができるようになったのが「Telephone」。これは19世紀の終わりにできました。そして、1920年代の終わりに「Television」ができました。一番初めにきちんとしたかたちで発明されたのは日本なのですが、遠くの人に、映像などいろいろなものをそのままそのときに届けて見せることができる仕組み。これは、人間が求めていた「遠くのことを知りたい、自分に引き寄せてみたい」という願いを実現した道具なのです。

姜先生も蒲島知事も私も、幸いに若い時に外国に行く経験をすることができました。でも、それができない時、あるいは、そこまで時間も余裕もない時に、代わりに果たしてくれるのが、遠くの情報を自分のところへ届けてくれる方法なのです。

今は、皆さんには、この「Television」というものに加えて、「Internet」というものがあります。皆さんは、学校の中で普段の授業にインターネットをよく使っています。インターネットを使うことによって、よそからメッセージを受け取ることもさることながら、皆さんが自分のメッセージを、とんでもない遠くに離れている人、あるいは、その時声をかけても届かないような人のところに、簡単に届けられるようになりました。こういう道具を皆さんが十分に使いこなすことが大事なのだと、私は信じています。

便利だからといって、それに溺れてその装置に使われてしまうことにならないようにしながら、できるだけ便利な道具を使いこなす。それが、まず皆さんが自分から遠く離れた世界とつながっていく、そこを知りたいという願望に応えていく一つの重要なステップだと思い

ます。大事なことは道具に使われたい、そして、道具を使いこなしていき、それが私の今日の一番目のメッセージです。

さて、道具が使えるようになるのと何ができるようになるか。大きく開いた窓から遠くを見ることができます。自分が窓のない部屋に入っていたところから、大きく景色が見えるようになってきます。玉名市、熊本県、九州、日本。そして日本を越える世界。それが、とにかく見えるようになってくるのです。見えるようになってきた時に、更にもっと知りたい、もっと考えよう、もっと見たいという欲望を自分の中に積み上げていく。そして、窓を開けて、今度は自分が外に飛び出していく。そういう仕事が、きっと皆さんの目の前に出てくると思っています。

ここに一つ地図があります。どこの地図だか分かりますか。実はただの世界地図なのです。私がこういう地図を初めて見たのは、オーストラリアでした。オーストラリアは南半球にあって、世界地図で見るといつも下の方にあります。南半球の自分たちが、いつも北半球より下にあるというのは間違っている、自分たちだって、南半球だって、見方によっては上に立っていると言えるのだ、そんな思いからできた地図がオーストラリアが上に位置するこの地図なのです。一回転すれば、ごく普通の世界地図になります。つまり、人が立っている場所です。いぶん世界が違って見えてくるということです。

この地図は、ヨーロッパやアメリカの人が使う世界地図です。よく見ると、日本は、一番右側の端に小さく見えます。私たちは日本の地図帳を開くと分かるように、日本が太平洋の真ん中に来る地図をよく使います。つまり、自分が立っているところによって、世界の見え方が変わってくるのです。自分が日本人であるという思いを持ちながら、世界のいろいろなところに立ってみる。最初はテレビやインターネットを使って立ってみる。そして、できれば自分でそこに行ってみる。そういうことによって、自分の中に新しいいろいろな思いが起こり、違う目でものをいろいろ見分けていくことができるようになります。私のメッセージの二つ目は、「所変われば品変わる」、立ち位置が変われば見えるもの、景色が変わってくるということです。

さて、そこまで来たところで、私の一番最近外国に行った旅のお話をしようと思います。私は、皆さんの年ぐらいの1960年代、高校に行き、大学に行き、社会人になりました。この時代、私たちに一番精神的、思想的に影響を与えたのはベトナム戦争でした。ベトナムという国が東南アジアのインドシナ半島にあります。非常に成長していて、日本と非常に仲が良い国です。その国で1960年代大変な戦争が起きました。私は太平洋戦争の終る前の1944年に生まれたのですが、そのころ日本は平和な時代にあつたので、人々が殺し合うということが、どうして起きるのだろうか真剣に考えるようになりました。そして、その原因も、その結果としての悲惨さも、戦争が終わる頃に生まれた人間として、自分は何とかがして自分の中にもう一度その感覚を取り戻し、日本の人たちに伝えたいと思いました。ところが、地方の記者を経て東京に戻り、ベトナム戦争の取材に加わることがやっと実現するかと思った時に、ベトナム戦争は終わってしまいました。

その後、私はアメリカのことやヨーロッパのことに関わる仕事を中心になってしまっていて、実は去年の秋までベトナムに行く機会がなかったのです。そして50年近くたって初めてベ

トナムに行って、ベトナム戦争の一番厳しかった町に行ってきました。ベトナムのホーチミンというのは、昔、サイゴンと呼ばれていた一番南の町ですが、一番北の方にあるハノイという首都にも行ってきました。ベトナムの若い人たちも、日本の若者と同じです。ベトナム戦争と聞いても、あまり記憶がなく、正直言って関心もありません。ベトナム戦争の戦跡や戦争博物館に一体どんな戦争が行われたのだろうかと思に行く人も、若い人にはあまりいません。

例えば日本で、広島原爆の跡に行って、原爆の悲惨な姿を残した資料館の出口には、見学者が自由に記述できるノートが置いてあります。このノートを見ると、日本人よりも、外国から来た人たちの方が、広島原爆への思いを書き記した感想文の方が多いと言えるくらいです。つまり、世界の人たちが覚えていても、自分たちが忘れてしまっていることもあるかもしれません。

そんな思いでベトナムに行きました。ベトナムの町に行くと、驚いたことに、交通の手段で最も多いのはオートバイなのです。車以上の数のオートバイが、信号が変わるとバーンと走り出します。ベトナムは暑いところですが、大気汚染がひどく、夏でもマスクをして走る人が多いのです。

この国には、日本のオートバイ工場があります。この国で最初にオートバイを作って売り出した会社はホンダです。ベトナムの人たちにとって、オートバイの別の呼び方は「ホンダ」です。もちろん、カワサキもヤマハもありますが、ベトナムの人たちは「おい、お前のホンダはホンダか？」と言うくらい、オートバイの代わりにホンダなのです。この若い人たちは、君たちと同じように世界に目を向けています。

ベトナムは、まだ農業が中心です。しかし、ベトナムの隣にタイという国があります。ベトナムで作ったお米はベトナム米といって、日本の技術者が教えてあげた素晴らしいお米がたくさん採れるのですが、どうもタイ米として輸出する方がよく売れるらしい。そういう厳しい環境のもとで農業をしていますが、何とかして、自分の国のブランドでお米を売ろうと努力している人たちもいました。

それから、私はホーチミン市で、私の日本での知り合いが、ベトナム人と協力して創った学校に行きました。「カイゼン吉田学校」です。「カイゼン」というのは、皆さんよく知っている、物事を改善する、良く改めるという言葉ですが、今はローマ字で「K A I Z E N」と書くと、これがそのまま外国で通じる言葉になってきています。ホンダと同じように、ベトナムで良い仕事をしたいとめざす人たちの間では、改善というのは大事なことです。経済や産業を発展させていく上で非常に大事なことなのです。去年の秋に、この「カイゼン吉田学校」が開校しました。君たちとほとんど同じ世代で、17歳、18歳くらいの工業専門学校や高等学校の卒業生、大学生や大学の卒業生たちが、ここで日本語と日本式の企業で働くためのいろいろなことを勉強していました。

ここの人たちは、制服のポロシャツの胸に「K A I Z E N」と書いてあります。訪問した時は、朝礼の最中でした。写真の中央にいる女性はベトナム人の日本語の先生で、日本語の朝礼のあいさつを教えていました。そして、子どもたちに「今朝の当番は誰？」と日本語で聞き、「はい」と手を挙げると、「あなたは、今日は教室の掃除はしましたか？汚れたところ

はありませんでしたか？」と尋ねます。そういうところから、実はベトナムの人が日本の工場に働きに来た際に、言葉が少々できるだけではなくて、戸惑うことがないよう日本の企業や日本で働く人の労働倫理、そして働くということに日本人が持っている様々な思いをきちんと身につけようと一生懸命やっているのです。黒板には先生が書いた漢字がありました。

それから、できたばかりの二宮尊徳の像が飾ってありました。私は、子どもの頃に伝記を読み、二宮尊徳という人は偉い人だと学びました。これは、親を手伝いながら、寸暇を惜しんで本を読んで歩いている姿なのです。みんな、働く時、そして学ぶ時の思いというものが、日本にはそうやって培われているのだということ、若いベトナムの人たちが手本にして勉強するわけです。

なぜ、この人たちがこんな勉強をしているか。ベトナムの人たちにとって、日本の産業で訓練を受けながら仕事を覚えるということは、5年、10年頑張っただけで自分の国に帰ると、自分の国の自動車工業や機械工業を支えていく力を創る基になると思っているからです。そして、日本は、この熊本でも工場に働く人がだんだん少なくなっています。ですから、日本語と日本式の仕事ができる人、一緒に暮らし一緒に仕事をする人が日本は求めているのです。その呼びかけに応じた動きということが言えるわけです。

つまり、世界はものすごく広いのです。広いのですが、ものすごく狭くもなっているのです。例えば、ここから海を渡って中国に行く。中国の大連という町は、昔、日本の満州の一部でしたから、日本語教育が盛んでした。そこには、日本のパソコンメーカーなどいろいろなメーカーが事務所を開いています。そこで、日本語のできる中国の人たちを雇い、皆さんがメーカーのカスタマーセンターに「パソコンが壊れたのですが、どうしたらいいでしょう」と電話をかけると、実は大連に電話が転送されて、中国人の日本語の上手な人が皆さんの問い合わせに答えます。アメリカのテキサスで嵐が来て停電してしまった。そして、電話をかけると、その電話はインドにつながり、インドで英語の上手な人たちが「Hi, This is Mary」などと電話に出てきて、問い合わせに答えてくれます。「その周辺は今、停電が一部に起きていて、だんだん復旧工事が進んでいます。明後日頃には何とかしますから待っていてください」と、インドから電話で答えが来ます。私たちもアメリカ人も、実はそれぞれの国から遠く離れたところに電話がつながっていることすら気が付かないうちに、答えが示されるのです。世の中はそのように狭くなっているのです。

しかし、人間は多様です。生まれも育ちも宗教も文化も、ものの考え方もいろいろです。その人たちと、どうやって一緒にやっていくかということが、これからの世の中で一番大事なことになってきているのです。これは、好むと好まざるとに関わらず、みんなが自分でその時に備えていかなければいけないのです。最初に申し上げたように、知ることや見るということがすごく大事になってきます。何とかして、なぜそうなのか、何が起きているのか、その背景には何があるのだろうかということを知ること。そして、知る対象を世界に広げていくことが、すごく大事だと思います。

先ほど申し上げたように、知事も姜先生も私も、外国に行ってみることができました。見るだけではなく、そこで暮らすことによって、その人たちの社会の中の生き方やものの考え方も、ある程度分かるようになってきました。それが、少しずつその人のものの考え

方を変えていくのです。体験するということが、ものすごく大事になってきます。つまり、テレビやインターネットで知ったことは、みんなが知っています。しかし、なかなか理解しきれないことがいっぱいあるのです。それを自分の中に吸収していくということを重ね、積み上げていくことによって、違う考えの人や生き方の人たちが、少なくとも対話をして、お互いに理解を深めていこうと努力をすることにつながっていくのだと思います。

そして、外国に行ってみるとよく分かるのです。暮らしてみると、世の中は自分の思うとおりにならないことばかりなのです。あるいは、ほんの短い期間旅をして、その土地に飛行機から降りた途端に、自分の思うとおりにならないということがよくあります。その国に入るために、税関も通らなくてははいけません。入国手続きもしなくてははいけません。そして、その国に入っていく、自分の荷物を受け取って、空港のロビーに立つ。「さあ、タクシーはやバスはどこにいるのだ」「この首都までどうやっていくのだ」「着いたら親から連絡してくるようにと言われているが、電話はどこにあるのだ」「携帯電話は持っているが、携帯電話を外国から日本につなぐためにはどうしたらいいのだ」と自分の思うとおりにならないことばかりです。日本にいたら何でもなくできることが、とんでもなく難しいことになってくるのです。そこで、更に自分の言うことがなかなか通じない。それを通じるようにしていくにはどうしたらいいのか。自分の考え方と違う人たちと一緒に生きていくには、どうしたらいいか。そして、自分がめざしている目標にどうつなげていくか。目標を忘れずに、その方向に向かって一歩ずつ進んでいくということが必要になってくるのです。

これは、先ほどの世界地図と同じやり方で、日本の地図を逆さまにしたものです。日本海に面した富山県の県庁が、もう10年ぐらい前に作った逆さ地図。富山県流に言うところ「環日本海地図」と書いてあったと思います。こうやって見ると、最近韓国はこの日本海を東の海「東海」と呼びたいと言って、そのことが日韓の間で大きな論争になっていますが、私は、韓国の人々が「東海」と呼ぶのなら、それはそれでいいじゃないかと思います。韓国から見たら、目の前に広がる海なのです。私は、NHKに入って最初5年間は瀬戸内海で暮らしましたが、いまこうやって地図を見ると、うまく仲良くやっていけば日本海は日韓両国の内海に、有明海のようになるかもしれない、そういう海でもあるといえるのです。

しかし、蒲島知事が昔勉強した政治学、安全保障の世界からいくと、中国や韓国あるいは地図の北東にあるロシアなどの国々にとっては、地図の右上にある沖縄や尖閣の列島が、自分たちが太平洋に出ていくのに邪魔になる島々に見える人たちもいるわけです。このように考え方が違う人たちが、どうやって隣に居ながら暮らしていくか。それも、実は国同士の話し合いではなくて、一人一人のつながりの中で生まれていくと私は信じているのです。

さて、最後に皆さんに質問をします。後で討論の時間に、この質問の答えを皆さんに出してもらいます。「君がほしい方をあげるから、どっちでも好きな方を選びなさい。さかなか？それとも釣り道具か？」この質問の答えを考えてみてください。

そして、最初のタイトルのところに戻りますが、私はタイトルに「変化を待つな、自ら起こそう」と書きました。実は、変化を自分で起こす、この中で一人だけ「私は違う考えを持っていて、これを実現すべきだ」と言う勇気というのは、なかなか大変です。しかし、ルー

ルを守ってきちんと自分の勇気を持って、自分の考えを発表していくということは、実は非常に大事なのです。そして、できればその方向に変えていくことは、もしかしたら一番正しいことなのかもしれません。変化を待つのが一番易しいことです。でも、変化を待つというのはリスクがたくさんあります。つまり、自分で判断するのではなく、人の判断や多くの人たちの判断に流されることなのです。自分で判断して、自分が変化を生み出そうとすることもリスクはあります。私が昔会った有名なピーター・ドラッカーという経営学者は経営学の神様だと言われる人ですが、この人の信念は「変化を待つな。変化に流されるな。自分から変化を起こせ。自分から変化を起こすことはリスクがあるかもしれない。でも、そのリスクは変化に流されるよりも小さいのだ。」そして、その変化に耐えうる、自分たちで変化を起こしていくようにするためには、この「さかなか？ 釣り道具か？」の質問が重要になってくると思います。よく考えて下さい。

鼎談

進行係：蒲島知事)

これから鼎談に移ります。普通、大学の授業というのは、90分から100分なのです。今日は、それぞれの先生方にわずか30分しかありませんでしたので、言い足りなかったこともあるのではないかと思います。ただ、この三人でまた30分ですから、大変短い時間で鼎談をしなくてはいけないということです。

それぞれの先生方に、夢について語っていただきました。私も2～3分で、私の人生の中における夢は何だったのかということ話し、それをきっかけに、世界を知ることや夢を実現するために必要な力、夢を持ち続ける大切さ、そのようなことについてお話ししたいと思っています。

私は、昭和22年生まれですので今67歳です。皆さんよりも50年ほど長く生きています。この50年の長く生きた経験を皆さんにどのように伝えるかということ、やはり夢を持つことの重要性だと思います。私は貧乏で、頭が悪くて、そして鹿本高校で220番中の200番ぐらいだったのでビリに近かったのです。それでも3つの夢がありました。1つは小説家になること。本を読むのがとても好きだったのです。2番目に政治家になること。読んだ本の中に「プルターク英雄伝」があり、その中でカエサルのようなすばらしい政治家になりたいと思いました。3番目に阿蘇で牧場を開きたいという夢がありました。

その3番目のアメリカで牧場を開きたいという夢で、農業研修生としてアメリカに渡りました。21歳の時です。その前は、農協の職員として鹿本町農協に勤めていました。21歳の時にアメリカに渡りましたが、農業研修プログラムの中で、3カ月間だけネブラスカ大学で学科研修がありました。そこで学問に初めて目覚めたのです。24歳の時にまたアメリカに戻り、ネブラスカ大学の農学部畜産学部に入りました。28歳で卒業して、何をやりたかということが、その時初めて分かったのです。28歳の時に、「そうだ、政治学を勉強しよう」とハーバード大学に入りました。4年間在学して日本に帰り、筑波大学で17年、東京大学で11年教鞭をとりました。

60歳の時に、熊本県知事に出馬しないかという話がありました。みんな反対し、妻も離婚すると言ったのですが、やはり小さい時の政治家の夢というのがありましたから、61歳の時に、既に5人の候補がいた一番最後に立候補して、今は知事として皆さんの前に立っています。

このことから、夢というのがとても大事であり、どんなに貧乏でも、どんなに頭が悪くても、夢はたくさん持つことができるのです。夢には資源も資産も何も要りません。そういう意味では、その夢があって良かったと今は心から思っています。そして、皆さんが夢を実現するということはどういうことかということ、自分を信じることだと思えます。私は、人生の可能性は無限大だと思えます。例えば、高校でお金もなくビリだったのですが、28歳の時には初めて自分のやりたい道が分かり、ハーバード大学に行くこともできました。50歳の時は、東大の先生になることもできました。61歳の時には、知事になることもできました。だから、皆さんは、自分の人生の可能性の無限さを知ることが大事だと思っています。

2番目に大事なことは夢を持つこと。

3番目は夢を持つだけだと何も起きませんので、夢に向かって一歩踏み出すこと。しかし、一歩踏み出したら、その後は一生懸命に努力することだと思っています。夢を持つことによって、人生のどの時間であっても、どんな遅い時間であってもきっとその夢に向かって進む。夢を実現するかどうかというよりも、夢に向かって進むことが人間の自己実現ではないかと思っています。その間には挫折もあるでしょう。悩みもあるでしょう。しかし、その夢に向かって信じるのが、幸せなことではないかと思っています。

そういう観点から、世界を知ることの大切さ、夢を実現するための必要な力、夢を持つことの大切さなどについて、それぞれの委員に後の残りの時間を全て差し上げますので、まずは姜委員よろしくお願ひします。

姜委員)

私は今日は、自分の海外での経験をあまり話しませんでした。今井先生や蒲島知事とはまた違って、私が本格的に海外に出たのは29歳です。その時の体験は非常に大きかったですし、先ほど今井先生からも、地図の描き方で「所変われば品変わる」という話がありました。皆さんは、自分というものをいつも考えているから、時々苦しくなる時もあるかもしれないと思うのです。人間というのは、いつも自分自分自分ということが常に頭の中にあるのだと思います。実は、自分で自分自身が苦しんでいる時があるのです。そういう時に限って、実は夢を持っていないのです。夢が何であるのか分からない。また、自分なりにこれをめざしていこうというものが見えない時ほど、実は自分の姿が、いつも大きく自分の前に立ちほだかっている場合があるのです。それで、自分がだんだん嫌になったり、自分について自分自身が描ける夢がなければいほど、実は自分自身がとても小さく見えたり、あるいは他人との関係でうまくいかなかったりするわけです。つまり、そういう時ほど、小さなことにどうしてもこだわってしまいます。人は、自分自身にこだわり過ぎるとどうなるかと言うと、たいていはノイローゼになってしまいます。そういう時に、自分をもう一つの目で見る。これが非常に大切なことで、なかなかできることではないのです。

先ほど、今井先生の方から地図をいくつか皆さんに示されて、とても面白かったと思うのです。歴史では、皆さんは天動説から地動説へということの頭の中では学んでも、自分自身についてはどう思っているのか。

実は皆さんビックリするかもしれませんが、私は高校時代まで人前で話ができなかったのです。人前で話すことがとても辛くて、人前に立つと赤面してしまうのです。よく私のところに「どうしたら先生みたいにうまく話せるのですか」と聞きにくる生徒がいます。しかし、私は高校時代まで人前で話すことができませんでした。それはどうしてなのだろうと考えると、自分にこだわっているからこそ恥ずかしいと思うのです。しかし、いったんその恥ずかしさというものを、もう一つの目で見られるようになると変わってくるのです。

では、もう一つの目で見られるためにはどうしたらいいのか。それは、先ほどの今井先生の話ではありませんが、自分ではどうにもならない世界、あるいは自分では自分のことがよく伝わらない世界、そういう世界に足を踏み入れてみる時に初めて、自分への固着からだんだん解放されていくのです。高校生の時に、私は人前に立つことが嫌だったし、恥ずかしかったし、人前で話すこともできなかったし、そういう自分をモヤモヤしながら、あくまでも自分にこだわっていました。つまり、自己中心、エゴセントリックという言葉があるのです。これが、今の多くの学生に見られる現象ではないかと思います。そういう時に、自分というエゴを中心に動いていく世界を、もう少し違う目で見ると、やはり世界に出てみることでよく分かるのです。

1979年、まず一つは先ほどのベトナムの話がありました。中国がベトナムに侵攻したのです。中国が、ベトナムに対して制裁というかたちで軍事的に進出し、介入したのです。同じ社会主義を名乗っている中国とベトナムの間で戦争が起きたのですから、これは驚きました。

第2番目に、イスラム革命が起きたわけです。世界史、現代史の教科書にイライラ戦争などと書いてあると思いますが、イランとイラクが戦争をやっていたのです。イラクとイランの首都はわかりますか。イラクの首都はバグダード、イランの首都はテヘランですが、皆さんが海外のニュースを見ると、かなりイランが重要なテーマになっていると思います。私もイランとイラクの区別が全く分かりませんでした。イランはアラブではないわけです。しかし、そういう初歩的なことも分からずに、実は当時の西ドイツのニュルンベルクに留学していたのです。その時にイラン革命が起きたわけです。

皆さんは、ドキュメントなどでイラン革命のことを知っていると思います。学生寮には、イランとイラクからの留学生が多かったのですが、その時初めて何が起きたかということが分かったのです。皆さんは、イスラーム原理主義という言葉の時々聞くでしょう。英語で言うと「Fundamentalism (ファンダメンタリズム)」です。しかし、この原理主義という言葉は、元々はイスラームからきたのではなくキリスト教です。それを私たちは、イスラーム原理主義と言っていますが、正確にはイスラーム復興主義と言います。では、イスラームとはどういう世界なのでしょう。例えば、今ここで私がメッカに向かって「アッラーアクバル」と言い出したら、皆さんはビックリするでしょう。しかし、そういうイスラム教徒が世界で十数億か、膨大な数いるわけです。では、アジアで最大のイスラム国家、イスラム教徒が多

いところはどこでしょう。それは、インドネシアです。皆さんが海外に出た時に、そういう宗教的な違いを持った人たちと一緒にいる機会があるわけです。私には、1979年の29歳までその経験がありませんでした。その時初めて、世界が動いているという感触を持ったのです。イスラム教徒というのを何も知らなかったし、我々の学校の教科書では「イスラム教」と言わないで「マホメット教」と教わったような気がします。こういうことを海外に出て初めて知ったのです。

それから、1979年は、マーガレット・サッチャーが「鉄の女」と言われました。皆さんは、メリル・ストリープという女優さんが出たマーガレット・サッチャーの映画を見ましたか。イギリスに初めて行って、マーガレット・サッチャーという人が出てきた時に、初めて私は、このサッチャーという人がどういう人で、今から何を語るのかというのが分かったのです。

実は、1979年というのは大きな歴史の転換期だったのです。日本では何があったかと言うと、大平正芳さんがちょうど大平改革を成し遂げようとした時で、私はその時初めて世界史ということが分かったのです。私は、学校の教科書だけで世界史を学びます。しかし、初めて海外に行って、向こう岸からこちら側を見るという目を与えられました。皆さんが海外に出るということはなぜ重要か。こちら側から海外を見るだけではなく、向こう岸からこちらの岸を見て、その時日本というものはどういうふうに分かるのか。この時初めて、自分というもののこだわりから解放されるわけです。ですから、異質な文化や異質な宗教、異質な民族、異質な人種を知るということは、実は自分をよく知ることにつながるのです。そういう体験があって初めて人は、自分自身について、エゴセントリック、自分だけを中心にしてもものを見る見方から解放されていくのが分かります。そして、自分の良さがよく分かります。私もやはり海外に出て、日本の良さがよく分かりましたし、熊本というものが本当に自分にとってふるさとなのだと思えます。地球上どこに行っても、熊本は良いところだと思いがものすごく強くなるのです。

だから皆さん、温泉に行くのもいいですが、やはり海外に一度は出た方がいい。そして、できれば引率されて出て行くよりは、少人数で、場合によっては大学生になれば自分でリュックサック一つで出てみる。先ほどの話にありましたように、「じゃあベトナムに行ってみよう」「ベトナムにはどんな人がいるのだろう」そんな気持ちがあることによって、向こう岸からこちらの岸が見えます。その時、世界史というのがどういうものなのかが、学校の教科書ではないものとして見えてくるのです。私は、1979年のこの出来事がなかったならば、今ここに立っていないと思えます。

そして、決定的に重要だったのは、アエロフロートという現在のロシアの事実上国営の飛行機で、モスクワ経由でフランクフルトに行ったのです。モスクワは、翌年がモスクワオリンピックでした。私はその時、トランジットですから外に出られません。そして、国際空港のトイレに入って、備え付けのトイレトーパーを使うと思ったら、新聞紙みたいに硬かったのです。我々の時代はトイレトーパーがなかったから、新聞紙を揉みほぐして使っていました。その時初めて、私はこの国は崩壊すると思ったのです。なぜならば、これからオリンピックをやるという国の国際空港のトイレがこんな状態であるならば、普通の人

はもっと貧しいだろう。つまり、トイレットペーパーからその国の実情も見えてくるわけです。私は、「これはもう行き詰まっている。社会主義というものは駄目になるのではないかと漠然と思っていたのですが、10年後にベルリンの壁が崩壊しました。やはり驚きました。自分がその時漠然と思っていたことが当たったのです。やがて、ソビエトが崩壊しました。皆さんは海外に行くことによって、その社会の暮らしなどをどの視点から見るのか。トイレットペーパーから、あるいは市場で売られている野菜や果物、あるいは魚やお肉からこの国の食糧事情を見て、この国はどのくらいであるのかというのが見えてきます。そういうものの見方を自分で知恵として学べるのは、やはり海外に出てみないとなかなか分からないのです。

日本は、確かに地方の過疎化が進んでいますが、世界で稀にみるほど大体平均してインフラが整っています。でも、海外はそうではありません。そういう中で、自分の見る目をもっと太くしていく。それが、自分の心を太くしていくことになりまして、そこから夢というものをもっとリアリティーをもって、自分の中から出てくるのではないかと思います。私は1979年の経験がなかったら、その後の自分のものの見方はなかっただろうということで、とても海外に出て良かったということを申し上げたい。

蒲島知事)

ありがとうございました。では、今井委員お願いします。

今井委員)

私の仕事は人に会う仕事でしたから、いろいろな人に会いました。もう一つの私の仕事は、自分が遭ったこと、会った人、自分が経験したことを通じて、皆さんに何が起きていてどんな人が世の中にいるかということを知らせることだったのです。結論から言うと二つのことだと思います。

一つは、人の数だけ物語があるということです。例えば、今被災地に行くと、2万人の方が亡くなったり行方不明になったりして、その家族の方や避難した方を含めれば50万人、100万人の人が、2011年3月11日の後、地震と津波と原発の事故の中でつらく悲しい経験をしているけれど、決してみんな同じ経験ではないのです。一人一人違うのです。君たちがこの玉名市や玉名市の周りで育って、北稜高校に学んで、みんな同じようなところで育って同じような教育を受けても、みんなひとと違う物語が続いて展開していくのです。だから、自分の物語というものは、必ずしも自分の書いたとおりにいかないのです。いかないのだが、その時のその時の自分の選択がかなり左右してきます。だから、夢を持つ。知事も姜先生もおっしゃる。夢を持って、そこに向かって目線を高く上げて進むというのは、ものすごく大事だと思うのです。

もう一つ、私が自分の70年を振り返ってみて、決していつもいい事ばかりではないのです。つらいこともあります。人から認められないで落ち込む時もあります。いろいろなことがあるけれど、結論を言えば、人生に無駄は一つもないのです。君たちが、学校で校庭の掃除をさせられる。「なんだ、こんなばかばかしいことをやって」と思うかもしれないが、物

をきれいにするという経験は必ず将来に役に立つのです。

例えて言えば、君たちのパソコン。スマホやiPadだと少し違いますが、パソコンで、Windowsでいろいろな作業をします。そして、要らなくなった文書や図はごみ箱に捨てるでしょう。ごみ箱に捨てても、実は無くならないのです。パソコンの奥まで入っていくと、ごみ箱に捨てたはずなのにちゃんとパソコンに残っています。そして、君たちに残る、頭の中に残る、体の中に残るのは、そういうことだと思います。何かを捨てても捨てても、自分がなぜそれを捨てると選んだのかということや、この道は進まずこっちに進むと決めても、その時になぜそう判断したかということは自分の体の中に残ります。そして、自分の判断では自分がやめたことを、やった人の生き方が向こうに見えてきます。つまり、人生には何にも無駄はない。先ほど姜先生がおっしゃっていましたが、今の君たちの頃は無駄なことをむしろ一生懸命やる事の方が、必ず後で役に立つという話になっていくのではないかと思います。

先ほど、最後に質問を出しました。君たちの目の前に、釣ったばかりの活きのいいさかなと釣り道具があります。そして、その持ち主が、君が好きな方を選んでいいと言った場合、この中でさかなを選ぶという人はどのぐらいいますか。さかなを選ぶ。おなかがすいているんだな。では、釣り道具を選ぶという人。たくさんいますね。私もどちらかという、みんなと同じ釣り道具を選ぶ方だと思います。釣り道具を選ぶと、必ずしもいつも釣れるわけではありませんが、釣り糸に餌を付けて海や川で釣り糸を垂れるとさかなが獲れます。さかなを選んだ人は、そのさかな一匹食べてしまうと、もう次のさかなを取る手段がありません。だから、釣り道具を選び、釣り道具をうまく使えるようにして、その釣り道具をできればもっといいものに変えていくことができるかもしれません。そして、自分のお腹を膨らませることも、場合によっては自分の生活を支えることもできるかもしれません。

この言葉は、実は、先ほど紹介したベトナムのカイゼン吉田学校の校長先生に教わったのです。この校長先生はベトナム人です。外から見ても日本人によく似ているし、日本語はなにせ完璧に我々と同じように話せる人だから、日本人といってもおかしくないかもしれません。レ・ロン・ソンさんという40過ぎの人ですが、彼は日本の大学に留学して、優秀な成績を収め、自分で会社を創りました。その会社の仕事の重要な部分として、いわゆる人材派遣業ですが、派遣する人材を自分で育てて送りこんでいます。

彼が、ベトナムの若い人たち、学校に合格して入ってきた子たちに最初にする質問は、「きみは、さかなを選ぶか、釣り竿を選ぶか」という質問だそうです。必ずしも、それで学校に入れる生徒を選ぶわけではありません。そういうふうにもその子どもたちの、学生たちの持っている思いを見極めながら、さかなが欲しいという人たちはできるだけ早く現場に出て、日本に行かなくても、ベトナムで良い仕事が見つけれられるように応援してあげます。釣り竿が欲しいと言った人は、日本に渡って5年、10年でも努力して、素晴らしい技術者になってベトナムに帰ってきて、自分の国を育てていくような人に育てようと考えて言っていました。なかなか現実にはそれほど理想どおりにいかないのではないかと思います。一方にはありますが、そうやって人を育てようという人は日本にも外国にもいるものです。負けないで、良い釣り竿を手にして、良い仕事をしていってほしいと思います。農業でも、工業でも、海

の仕事でも、ジャーナリストでも、大学の先生でも何の仕事でもいいのです。今、あなたたちの前には無限大に選択肢があるのです。人生に無駄はないから、少しずつ試しながら進んで行ってほしい。

蒲島知事は、30歳に近くになってやっと政治学を志したのです。人生は不思議なのです。みんながその不思議にチャレンジして行ってほしいと思います。

蒲島知事)

ありがとうございました。後でコメントの時間がありますので、ここは一言だけコメントします。

今、今井委員がおっしゃったように人生には無駄がない。今井委員は70歳にしてもそう思えるし、私も67歳にして人生には本当に無駄がないと思います。まず貧乏な生活をしたことも、今とても知事として役に立っています。農協の職員になったことも、知事としてはとても役に立っています。あるいは、ネブラスカ大学で畜産学を勉強したことも、口蹄疫などにはとても役に立っています。それから、アメリカで、奴隷みたいに農場で働かされたことも、今はあれがあって良かったと思います。そして、その後政治学を勉強したことは、特に政治家として役に立っています。実は東大の法学部で政治学を教えている時に、ネブラスカ大学のあの時間に政治学の本を読んでいたらもっと良かったと思いましたが、知事になったらそれが生きてきます。そういう意味では、どんな失敗も、挫折も、自分たちの生きてきた道はみんな人生のパズルみたいで、1つでも抜けると、私は自分の人生ではなかったと思っています。今井委員の「人生に何の無駄もない」ということには、100%合意したいと思います。

ここで、質問の時間がありますので、皆さんの中から3人ぐらい質問を受けたいと思います。

質問1)

北稜高校の2年生です。現在の姜さんと蒲島さんと今井さんの夢は何ですか。

姜委員)

私の夢は、一番は熊本を州都にすることです。去年も、オーストラリアのキャンベラに行ってきました。皆さん知ってのとおり、シドニーは非常に大きな商業都市ですが、キャンベラという首都があって、シドニーと本当に良い関係になっているし、熊本を九州のキャンベラ、ワシントンにできればいい。これが夢です。

蒲島知事)

応援ありがとうございます。私も、知事としての夢の一つは、熊本を将来の道州制の時に州都にすることですが、何よりも日々の夢は、熊本県の県民が幸せになることです。毎朝大体3時半に起きて、朝日はまだ出ていませんが、まずは熊本県民が幸せでありますようにと朝日に向かって祈ります。私の夢は皆さんが幸せになることです。今日いらっしゃった方は

全員幸せになってほしいと思います。

今井委員)

では、最後に私の夢の話をします。私は、17～8歳の時からジャーナリストになりたい思い、新聞に行くかテレビに行くか迷いましたが、テレビを選びました。テレビの記者になる時の試験で、「君はアナウンサーにならないか」と言われました。それで、私は、「アナウンサーになるのなら新聞社に行きます。記者になりたいのです。」と答え、幸いにもその夢は叶いました。ところが、40過ぎて「キャスターをやりなさい」と言われたのです。もう社員になっていたから、嫌だと言っても無理やりさせられて、この時は本当に嫌だったです。しかし、なぜかその後2年ずつ3回もやらされました。そして、キャスターになって、自分では皆さんと直接対話をしているような気持ちになるのですが、本当はそこまでできてないのです。そのうち、一度に何百万人にも何千万人の人にニュースを伝えていくことの限界のようなものを感じてきました。先ほど物語が一人一人によって違うと言ったように、自分の仕事としては、やはり一人一人の物語をみんなに伝えたいと思うようになったのです。50を過ぎてからは、大きなニュースの仕事もしましたが、自分の希望が通る時は、できるだけ「一人の人を追う」という番組を10本か20本作りました。その仕事を終えた時に、次にやりたいと思ったことは、学校の先生になりたいということ。そして、たまたまそういうチャンスがあり大学の先生になりました。今、三年経って、来月初めて私が教えた学生たちが卒業していきます。その卒業式が楽しみです。夢です。

質問2)

私は、北稜高校で農業クラブ会長を務めています。蒲島知事は、熊本の農業をこれからどのようにしたいとお考えでしょうか。

蒲島知事)

私は、これまでの農業政策は、生産額を最大化するような政策だったような気がします。それを、蒲島農政は稼げる農業にしようということを考えています。

例えば、稼げる農業というのは、コストをよく考えること。それから、値段を高くすること。これはブランド化と言います。ブランド化することによって熊本の農産物の値段を高くします。そして、農地集積をすることによってコストを安くします。そういうことを踏まえて、総合的にそれぞれの農家の人たちが「経済的余裕」と「誇り」と「夢」を持てるような農業にしたい。「森のくまさん」が、米の食味ランキングの日本一になりましたが、それは価格が高くなると同時に、農家の人たちの夢や誇りにもものすごく結びついているのです。

そして、うれしいことに今、農業新規参入の若い人たちが、恐らく全国でも北海道に次いで二番目に多いのではないかと思います。農業にはとても夢があります。

例えば、農業があることによって、地下水が育まれています。農業があることによって、景観が大変良くなっています。例えば、「イエロープロジェクト」で、新玉名駅の前はこれから菜の花がいっぱい咲くでしょう。それを見に多くの人が出てきます。それを見て玉名の

人が喜び故郷を誇りに思うようになります。そして、北稜高校の生徒たちが、「じゃあ、今度はもっと大きなくまモンの絵を描こう」ということも今考えておられると聞いています。蒲島農政の一番大事なことは、皆さんが夢を持って農業に参入できること。それを、今一生懸命にやっているところです。

質問3)

今日は本当にありがとうございました。県知事にお尋ねします。これは平成21年4月の21日に県知事に出したと思いますが、県知事の言葉で「1 熊本県を稼げる県にすること。2 長寿を楽しむ社会を構築すること。3、品格ある熊本を創ること。4、夢のある教育を実現すること。」それに関連して、平成26年2月2日の熊日新聞によると、首都圏の移住希望者は熊本が5番目になった。いろいろなもので、くまモンの効果があった。本当に蒲島県知事が21年から、過ぎ去った時間、現在、未来に、人材育成や活力などこの場を借りて住民の一人として感謝申し上げたい。

これだけ若い人が結構来ていますが、若い人に夢を与えてくださった言葉。明日自分の人生は自分で切り開いていかなくてはいけないけれども、本当に若い人たちは、良い友達を作り、良い恩師、人間関係、信頼関係を構築されますように。私は、年寄りの立場で、南関から来ました。もう68だからあまり言えませんが、良い人間関係、信頼関係を構築すること。それで、自分のことは自分で変わらなくてはいけないと思いました。県知事、本当に今日はありがとうございました。

蒲島知事)

質問ではなくてコメントということで、ありがとうございます。

それでは、そろそろこの鼎談を終わる時間となりましたが、最後に5分ほど知事の取りまとめの時間がありますので、今日のお二人の講演と鼎談を踏まえながらお話ししたいと思います。

姜委員から4つのことが大事だと話がありました。1つは本との出会い。2番目に友との出会い。3番目に師との出会い。そして、4番目が世界との出会い。これが大事だということを感じましたが、では、それを可能にするのは何なのか。私は、これは大学進学ではないかと思っています。今日は高校生の方がたくさんいらっしゃっておりますし、保護者の方々も来ておられますが、是非、皆さんが大学に行く機会を持たらと思っています。今は我々の時代と違って、大学は全入の時代です。大学の方から皆さんを選んでくれる、皆さんも大学を選べる、そういう素晴らしい時期に来ていると思います。

私の教育の目標というのは、キーワードが3つあります。1つは「夢」。2番目に「海外チャレンジ」。3番目に「貧困の連鎖を教育で断ち切る」。そういう意味で、皆さんが大学に行きたいけれどもお金がないから行けないということがないように、我々はしっかりと教育行政を行わなくてはならないと思っています。

皆さんが、そういう友との出会い、本との出会い、師との出会い、世界との出会いに、より多くチャンスを得るためにも、是非皆さんも大学で自分を試し、様々なかたちで夢を叶え

ていただきたいと思っています。

今日は夢と教育、知の集積というかたちで、教育問題を初めてリレー講演で、このようなかたちで提示することができました。今日はたくさんの高校生と保護者の方、それから先生方も来ていらっしゃると思いますが、まず、この若者たちの人生の可能性は無限大だと、そのように信じながら、少年少女の夢を叶えていくのが我々大人の役割ではないかと思ひますし、政治の役割もそこにあると思ひます。

是非、皆さんは自分たちの可能性を信じて夢を持って生きていただきたいというのが、私の知事としての取りまとめです。どうも今日はありがとうございました。